

# 地域ニュース

## 痛む学 入門講座

◆ 46 ◆



森本昌宏(もりもと・まさひろ) 大阪  
なんばクリニック本部長。平成元年、大阪  
医科大学大学院修了。同大講師などを経  
て、22年から近畿大学医学部麻酔科教授。  
31年4月から現職。医学博士。日本ペイン  
クリニック学会名誉会員。

「痛む足動く趾症候群」とはいつぶろ変わった病名ではあるが、「painful moving toes」を直訳したものである。別名で「痛む足動くつま先症候群」とも呼ぶ。

1971年、英国の神経内科医スプレーンらが、医学雑誌『Brain』において初めて紹介した症候群であり、片側ないしは両側の下腿・足の灼けるような、うずくような持続的な痛み、痺れるような不快感、足の指の不随意運動(意図していないのに出現する動きで、意図して止めることができない)を、特徴とする疾患である。足の指(特につま先)であるが、

足首にも起こることがある(をくねるような、かつ伸ばして曲げてといったステレオタイプの連続的な運動)。男性に女性の2倍多くみ

られ、中年・高齢者に発症し、数年間続くことが多し。当初は下腿よりも下位の深いところに痛みや痺れ

が特徴である。一方、本症候群ではむしろ逆で、精神的緊張で抑えられ、随意的に数秒・数分間なら止めることが可能である。両者ともに不随意運動は睡眠時には起こらない。

「むずむず足症候群」(restless legs syndrome)と呼ばれる疾患でも不随意運動を生じる。この場合には通常、両足(手にみられることもある)に起こり、

「虫が這うような、ムズムズとした」不快感のためにじっとしていられず足を動かしてしまう。日中の活動時には目立たないが、夕方・夜間に強くなる。痛みを伴うことは稀である。治療には、抗てんかん薬のクロナゼパム(リボトリール、ランドセン)、ガバペンチン(ガバペン)、筋弛緩薬のバクロフェン(リオレサル)などの処方が行われている。

# 足の指がくねるように動く

## 痛む足動く趾症候群



イラスト 森井真理

感を感じるのみであるが、徐々に不随意運動を伴うようになる。なお、足の軽微な怪我、帯状疱疹や単純疱疹、腰椎圧迫骨折、脊髄の異常、アルコール性多発性ニューロパシーなどに伴って発症したとする報告もあるが、その原因は未だ不明である。

「むずむず足症候群」(restless legs syndrome)と呼ばれる疾患でも不随意運動を生じる。この場合には通常、両足(手にみられることもある)に起こり、

「虫が這うような、ムズムズとした」不快感のためにじっとしていられず足を動かしてしまう。日中の活動時には目立たないが、夕方・夜間に強くなる。痛みを伴うことは稀である。治療には、抗てんかん薬のクロナゼパム(リボトリール、ランドセン)、ガバペンチン(ガバペン)、筋弛緩薬のバクロフェン(リオレサル)などの処方が行われている。

次回は1月19日に掲載します。